

空



2006年

SORA 14号

晴夜 (14) | 3

柴田 佐知子

水車より湧いてゐるなり春の雲

椿餅恋の話を聞くばかり

振り向かぬうしろがありて涼しかり

羽搏いて走る鶏瓜の花

大いなる向日葵に海しづもれり

暮れてゆく暈の上の浮人形

ソーダ水窓に真昼の町歪む

日焼けして頬骨高くなりけり

日脚伸ぶ

服部 早苗

塩壺に塩しつとりと冬青菜

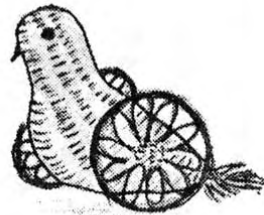
豆浸る寒九の水に皺を寄せ

カプセルの効いてくるなり青木の実

日本狼守りしめとす奥の宮

臘梅の香をもて宮を拝しけり

白鳥を迎へ起伏の古墳群



萌

水鳥の飛白のごとく着水す

白鳥を見に來し鴨に囲まれし

億年の海の記憶をみかん山

をさな子の選にもれたるみかんかな

親指の爪に半月日脚伸ぶ

春寒の意を決するに赤き服

恋猫の集まつてくる駐車場

三月菜水を飛ばして洗ひけり

淡雪に日ざし混じりてゐるやうな

鼓

動

樋口みのぶ（旧名遠野萌）

日を溜めし菜の花畠のあるばかり

亡き人の靴は磨かれ柿若葉

梅干の眉間に味の出できたり

逃げ水を抜けたる猫の揺れてゐし

水神の下を雪解の鼓動かな

山なみの上に雪山御開帳



睫毛の先より春眠の来たりけり

田水張る空真四角のまま暮れて

春宵の投網置かるる橋の上

闇すでに春の静寂となりにけり

山寺や鎌のやうなる月の出て

雪女ゆきの多さに疲れけり

風船の紐の迷へる置き所

昆虫学者の頬に乾ける春の泥

夏帽子草原に画布並びたる

西
日

青山 悠

夕暮れの雀かたまる花の下
今年また雨となりたる御開帳
踏ん張れる張子の虎や夏兆す
梧桐に青き雨降る昼餉かな
筋道のたたぬ言ひ訳金魚玉
アマリリス園児の列はすぐ歪む



茶摘籠重ねてありし通し土間

誰彼に礼する媼麦の秋

頭を揃へ上流めざす鯉幟

正装の女のごときダリアかな

麦秋や葎に立てかけ猫車

禁教にほろびし藩や桜の実

山蟻の走り入りたる仁王門

水門をひらく背見ゆる夏雲雀

猫の尾が動く西日の漁師町

石 嶮 玉

秋 千晴

冬帽子間違へられて会釈する
如月の寺に箒目なき日かな
不揃ひに盛り上がりたる春の山
雨粒に鈴蘭一つつつ揺るる
蹲踞に梅一輪の遊びかな
名を聞いて十二単をさらに見る



石段をさくらさくらの愛宕山

種袋目移りにして買ひ過ぎし

廻りつつ歪み正せり石鱈玉

潮干狩やめる切つ掛けなきままに

隣よりはびこつてくる仏の座

春うらら合はせ鏡に襟を抜く

ただならぬ恋猫に犬尻込みす

惜春や鯉からまつて池にごる

弓のごと大竿歪め鯉幟